

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

移動表現に関する日中対照研究—認知意味論の立場から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Cho, Gan メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2596

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



移動表現に関する日中対照研究

— 認知意味論の立場から —

(内容の要約)

移動表現は言語表現の中でも最も基本的なものの一つである。このため移動表現の研究は広く言語表現の一般の性質を知るための重要な手段となりうる。

本研究では、中国語と日本語の移動表現に見られるさまざまな共通点と相違点を手掛かりにし、両言語の話者が移動表現に関連する諸概念をどのように言語化し、認知しているかについて、認知意味論の立場から考察する。

本論文は本章と終章を除き、主に以下の五つの部分から構成される。

第1章. 認知意味論と移動事象

第1章では、理論背景である認知意味論の言語観と移動事象に関する諸概念を概観する一方、移動事象という枠組みのもとで対照研究の可能性を示す。

山梨(2009)は、認知言語学の言語観について以下のように述べている。

認知言語学は、記号的文法観の考え方を投入することにより、構成性原理によって予測可能な言語現象だけではなく、日常言語のゲシュタルト性にかかわる言語現象も包括的に規定していくアプローチをとる。

(山梨 2009:29)

ゲシュタルトを考える上で、重要なのが全体は部分の総和に等価ではないということである。具体的に言うと、以下の二点がある。

- 部分より先に知覚されるのは全体である。
- その全体を前提として、各部分の位置づけが可能となる。

移動という事象は普遍的であり、移動事象を構成する概念要素も各言語に共通しているものと予測される。一方、どのような移動構成要素をどのような文

構成要素で表現するかについては、言語によって違いが見られることが明らかにされている(Talmy1985、1991、2000b；松本1997、2017)。つまり、同類の事象を表現する言語間の構造の相違を記述することによって、どのような文構成要素がどのような移動構成要素を担うかは明らかにすることが可能である。

第2章. 経路動詞“过”の意味分析-「渡る」との対照を通じて

第2章では、経路動詞の“过”を取り上げる。

移動動詞は単なる空間的な位置変化だけではなく、より抽象的な概念が表現できるという点で、様々な個別言語の研究において、多くの研究者の注目を集めている。中国語学の分野では、移動動詞の“过”に関する研究はよく見られる。吕叔湘(1999)は記述文法の立場で動詞“过”の意味記述を行った。一方、杉村(1997、2000)、丸尾(2006、2014)は趨向補語としての“过”から、“过”の意味特徴を分析した。また、連語論の立場から動詞“过”を記述し分析するのは方美麗(2004)がある。

第2章では、上記の先行研究を検討しながら、従来の中国語だけを観察する意味記述だけで説明できない現象、すなわち、従来、中国語学において気づかれなかった多くの問題点が、日本語との対照を通して明らかにするのである。例えば、以下の(1c)(1j)を参照されたい。

(1c). 我是 从 桥-上 过-来 的。

私 COP から 橋-上 過ぎる-来る DE

(1j). 私は橋を渡ってきました。(東方中国語辞典 2004:222)

(1c)と(1j)の統語関係を比較すると、同じ移動事象の言語化であるにも関わらず、(1c)のように中国語では介詞¹構文が取れる一方、日本語の(1j)は対格構文が使

¹ 中国語の介詞について、朱德熙(1982)は以下のように述べている。

从语义上看，介词的作用在于引出与动作相关的对象（施事，受事，与事，工具）以及处所，事件等。

朱德熙（1982：174）

（意味の面からみれば、前置詞の働きは、動作に関与する対象(動作者、

われている。なお、中国語の場合は、下記の例(2)のように、対格構文が取られる場合もある。

(2) 小李 过 桥 了。

李先生 過ぐる 橋 CRS

李先生は橋を通り過ぎた。

では、同じ対格構文が取られる(2)(1j)は果たして同じ事象なのだろうか、そして、例(3)(4)に示されたように、上記の(1c)(1j)はダイクシス動詞に対する制限の相違も見られる。このような現象は、従来十分に論じられてきたとは言えない。

(3) a. 小李 从 桥-上 过-去 了。

李先生 から 橋-上 過ぐる-行く CRS

b. ??小李 从 桥-上 过 了。

李先生 から 橋-上 過ぐる CRS

(4) a. 李先生は橋を渡ってきた。

b. 李先生は橋を渡った。

本章は経路構成要素の観点から日本語の「渡る」と中国語“过”“过来/去”を分析した結果、以下のようなことが分かった。

日本語の「渡る」と中国語“过”は中間経路を担うという点で同じである一方、日本語の「渡る」は起点領域、通過領域、着点領域という三つの要素に関

受動者、間接関与者、道具)および場所、時間などを導くことにある。) 杉村・木村訳(1995:235)

さらに、中国語の介詞と英語の前置詞の関連性について、輿水・島田(2009)は以下のように述べている。

「介詞は、英語の前置詞が、名詞や代名詞の前に置かれて、その語と文中の他の語との関係を示す点がよく似ていることと、原語のまま介詞と呼ぶのはなじみにくいこともあり、前置詞と訳される場合が多い」 輿水・島田(2009:277)

与している。それに対し、中国語の“过”は通過領域としか関与していない。また、“过来/去”は認知主体の居場所が導入され、認知主体の居場所（こちら）とその外部に挟まれた境界を通過し、こちらからむこうへ、またはむこうからこちらへという意味合いになるため、一方からもう一方までという点で、“过来/去”と日本語の「渡る」は同じ表現効果がある。

第3章. 介詞“从”のプロファイルと機能

第3章では、第2章の補足として、介詞“从”を取り上げる。

“从”は使用頻度の高い介詞の一つであり、これまでに多くの研究者が分析を加えてきた。呂叔湘（1999）、刘月华（2001）は記述文法の立場から、“从”の用法に関する記述を行った。語用論と意味論の分析には、曾传禄（2008）と崔希亮（2012）がある。曾传禄（2008）は、介詞連語と動詞の共起関係から入手し、“从”の意味と機能を記述した。崔希亮（2012）は、事象構造に基づいて、“从”の多様な意味構造を「起点指示」と「経路指示」の二つに帰結させた。これらの先行研究は、それぞれ異なった立場から“从”を分析したものであるが、結論に大きな齟齬はないものと言える。

第3章では、上記の先行研究を検討し、認知・機能言語学の立場から、中国語の介詞“从”を再分析した結果、以下の二点が提示できる。

まず、介詞“从”には、従来の意味記述で挙げられてきたような中間点・中間経路を導く用法がないことを示し、スコープ理論の立場から、介詞“从”は起点を導く機能しかないと論証した。また、機能言語学の立場から、“从”フレーズは起点を焦点化する働きをもつと主張した。これは直接スコープの性質、即ち認知主体にとっての際立ちという観点にも合致している。

第4章. 日中両言語における「出入り動詞」の対立と認知類型

第4章では、中国語移動動詞の“出”“进”と日本語移動動詞の「出る」「入る」を取り上げ、主に以下のような言語現象²を論じる。

² この現象は金田一秀穂氏の基調講演「日本語の認知の視点」（第九回中日対照言語学国際シンポジウム中国・北京 2017/8/19）の指摘によるものである。

- (5j). 宇宙船は宇宙に{*入っ/出}た。 (5c). 飞船{进/*出}太空了
(6j). 宇宙船は大気圏に{入っ/出}た。 (6c). 飞船{进/*出}大气层了。

以上のように、着点への移動の場合、(5c)(6c)のように、中国語の移動表現が移動動詞“进”を選ぶのに対し、日本語の(5j)(6j)は(5j)が「出る」のみ、(6j)は「出る」と「入る」の両方が可能である。このような動詞選択上の差異は、意味記述だけで十分に説明ができないところである。このため、第4章では、認知類型論、即ち池上(2006、2011)で提案された「主観的把握」と「客観的把握」という対立概念を導入し、日中両言語における事象の捉えから、出入り動詞に関する(5)(6)の対立の動機付けを明らかにする。

本章は上記の言語現象を考察した上で、日中両言語における出入り動詞の認知類型が異なることを指摘した。日本語は、内外空間に対する話者の主観的判断によって、「出る/入る」が選ばれる一方、中国語は、内部空間と外部空間が客観的に別個の空間として捉えられ、内部空間にせよ外部空間にせよ、その空間の進入(移動の結果)にフォーカスするならば、いずれも“进(入る)”を用いることができる。“进太空(宇宙に入る)”が自然である理由もそこにある。なお、内部空間からの離脱のみにフォーカスする場合には、“出”が選ばれる。

第5章. 移動表現の類型論から見た中国語の動趨構造

第5章では、Talmyの理論的枠組みを用いた先行研究を検討する。従来の研究における中国語の移動表現の類型論的位置づけは、一般的に以下の3種類がある。一つは、Tai(2003)による中国語を「動詞枠付け言語(Verb-framed languages)」であるとする主張であり、もう一つは、沈家煊(2003)による中国語が「典型的な付随要素枠付け言語(Satellite-framed languages)ではない」とする主張である。三つ目はslobin(2004)に提唱された均等枠付け言語(Equipollently-framed language)である。この章では先行研究の論点を整理し、移動事象に関する中国語の類型論的位置づけを

より明確にする。

Tai(2003)は、下記の統語操作を根拠にし、中国語が「動詞枠付け言語」であることを主張する。

(7) a. 约翰 飞过 英吉利海峡。

ジョン 飛び-過ぎる イギリス海峡

ジョンはイギリス海峡を飛んで渡った。

b. 约翰 过-了 英吉利海峡。

ジョン 過ぎる -PFV イギリス海峡

ジョンはイギリス海峡を通り過ぎた。

c. *约翰 飞了 英吉利海峡。

ジョン 飛ぶ -PFV イギリス海峡

ジョンはイギリス海峡を飛んだ。

(Tai.2003:309-310 原文はピンイン)

(7b)に見られるように、移動の様態を表す動詞“飞”が省略できるのに対して、経路を表す移動動詞の“过”を省略することはできない。しかし、下記の例(8)のように、(7)と振る舞いが異なる用例も存在する。

(8) a. 叶子 飘-过-来 了。

木の葉 漂う-過ぎる-来る CRS

木の葉は風で飛んできた。

b. *叶子 过-来 了。

木の葉 通り過ぎる-来る CRS

木の葉は寄ってきた。

c. *叶子 飘 了。

木の葉 漂う CRS

木の葉は漂った。

(8)のように、無生物の移動の場合、経路移動動詞の“过”、または様態移動動詞の“飘”ではなく、“飘过”という結びつきでなければ

ならない。また、沈家煊(2003)は、中国語の動補構造を考察した結果、中国語の動補構造(動趨構造を含む)が典型的な付随要素枠付言語ではないと主張している。その理由の一つは、中国語の趨向動詞が補語としてだけでなく、主動詞(main verb)としての用法もあるからである。それは(9)を参照されたい。

(9) a. 小李 走-进 厨房 了。

李先生 歩く-入る キッチン CRS

李先生は歩いてキッチンに入った。

b. 小李 进 厨房 了。

李先生 入る キッチン CRS

李先生はキッチンに入った。

沈家煊(2003)によれば、中国語の付随要素と英語の付随要素は異なる。英語の付随要素は単独で主要部に当たる可能性がない一方、中国語の結果補語は主要部としての振る舞いがある。つまり、付随要素という概念において、中国語は英語ほど典型的ではない。このため、中国語の動補構造が典型的な付随要素言語ではないと主張している。

Slobin2004 は(10)の一例のみを用い、タイ語などのアジア言語と比較し、中国語を連続動詞言語(Serial-verb languages)と考え、述語を構成する前項と後項はいずれも動詞であって、しかも両方とも主要部とする振る舞いがあり、即ち、動詞同士としての地位が同じであるため、均等枠付言語(Equipollently-framed language)と認定した。

(10) 飞出 一只 猫头鹰。(2004:6 原文はピンイン)

飛ぶ-出る 一匹 フクロウ

一匹のフクロウが飛び出てきた。

第5章では、上記の幾つかの観点を整理することによって、構造

的分析だけではなく、認知意味論的に、中国語の動趨構造を分析した結果、以下の二点を提示できる。

第一に、主体移動表現において、有生物移動表現は非能格性が見られる一方、無生物移動表現は非対格性を帯びている。動趨構造において、前項動詞の省略を許すのは非能格性表現のみである。

第二に、無生物移動表現の場合、動趨構造における趨向補語は前項動詞に依存するという傾向が見られる一方、有生物移動表現は動趨構造における後項動詞に依存することが確認できる。